

*

ここ1年ちかくの間、「記号空間論」という自分独自の仕事をあめてきている。その作業は、ある程度まとまる毎に、適宜複写して、手近かな同僚の諸氏に配布し、あるいは、さまざまの機会に口頭でも報告して、大方の批判をあびてきた。このようなやり方は、費用も手間も極小ですむ上に、小廻りがきく点、わたしのいまの作業のあすめ方にふさわしいものなので、ここしばらくのあいだ、変更するつもりはない。

こいまるにまとめた断片のほとんどは、試論的な色あいのつよいものであって、すぐさま活字にする必要もないし、そうすることがこの作業にとって本質的な問題であるわけでもない。(あえて活字にこだわるのは、論稿の本質に疑念を抱いているからでも、また、公表ともなって生じる批判をおそれるからでも、ない。その程度の自己批判力は、とらえているのつもりである。また、ぐずぐずしているうちに、誰かに先をこされる、ということも、虞けていない。使える断片は、好きなように使えばよい。また、わたしのかわりにやってくれる人があるというのなら、それほど喜んで喜ぶべきことは、ない。) 本質的な問題は、書くという作業をつづけていくことにより、どれほど新しい地点にまで、わたしの議論を運んでゆくことができるかどうか、である。「記号空間論」のための草稿群は、まだだれひとりとして公表したことのない見解、常識のなかにほどこにも見出されない主張を、おのおの必お核としてなっているほかであって、そうした「独創」の領地を、正当な言説によって広げていくことに(だけ)、当面のわたしの関心は、措かれて

「研究」とよばれるようなことを専らにしている人々は、日頃顔をのきあゆせて、何やかや、互いに喋りちらしたりあるとしても、基本的には、各自の書きことばを、その交流の基礎にしているものだ(書きことばは、つねに字で書きあらわされるとは、決まっていなない)。わたしは、書きことばをいっそうふくらませておくためにも、このところ、字を書く作業の比率を増すようにしてきているが、実際、遠からぬうちに、生活上の変化によって、現在の同僚諸氏とも、5年に1度顔をあゆせるかどうかさえ見えないようにならなるとも、限らない。そのときにも、現在の有形無形のわたしの作業はつづいていけるはずなので、(まだよく考えつめたわけではないが)必要とないが、「会員」を募って、わたしの作業の断片をその節度(郵送等の手段により)手許にとどけるようにする態勢をとりたい、と思っている。(「会員」をつのるというからには、「会」ができればいいが、そういう細かき面倒なことは、いざというとき決めればよいことだし、多分やりゆきできまるだろう。)

現在、わたしの書いたものは、手近かな人に、割合無原則に手渡しているのだが、決して最善のやり方だとは、思っていない。偶然的な要因が、大きすぎる。掲示などをみて、希望をよせてくれた場合には、必おコピーをとどけているのは、もちろんだが、それはおそらく、面倒でもある。そこで、(「会員」をつのるまでのつなぎにもなる、ということ) 明年以降、わたしの自宅宛、葉書でその旨申しこみのあった人に聞しては、今後いちいち希望をよせて下さらなくても、毎回コピーを確実にお渡りする、というサーヴィスを始めようと思う。これは、わたしとしては、断りの葉書によって取消されない限り、無期限に継続する終身契約と、考えた。ただし、これらの方々には、毎年、これに要した果費を計算の上、請求額を負担してもらうことと、ある。) こうしたサーヴィスによって、現在のやり方の不備が、多少なりとも緩和されることを、のぞむ。

わたしの(半恒久的な)読者となつてくたうという人は、あつ

からく、葉書をもって、申しこまるべし。

* *

“このひと、なんだって社会理論なんかやってんタロー?”と、わたしのことを不思議がる人がよくいるように、わたしの方では、くぼくははげしく、同じい感かたさを抱かせられる。——そういう類いの事柄がすぐにはわかりあえると信じてたり、または、の、けから見め振りをして通したりするほどに、わたしは無邪気に楽天的でも、狡猾に狡敵でも、なれつもりだけれども。

人のことは人に任せ、おのれにたつて語るでしょう。高校の頃、社会学の入門書をいろいろ読みかじって、社会学科を志望することにしたのは、別に深い考えがあつたわけではなからうが、まあ「鼻が利いた」のだということにしておく。大学は、はじめの一学期で、おーかり馬鹿々々しくなり、以後2年間ほど、殆ど教室へは足を踏みいれなかつた。しかし、その間に、わたしは、でっかいサイクロトロンのようなところに突っこんでいき、どこかが（ひょっとすると）非常に変形してしまつた。自我が拡大したのだとも、欲望が拡散したのだとも、エゴが退縮したのだとも、言いたけいれは好きなように言えようが、とにかくそれは一種の解放には違ひなくて、ちょうど透析をうけている腎臓障害の患者のように、自分の血液が、状況の脈動とひとつになつて、世界の涯まで巡つてはまた戻つてきて、いるような緊張を感じた。それは、あまりにあたりまえのあり方だったので、そこからすべてを疑うべきだと思われた。もちろん、サイクロトロンはまもなく見えなくなつたが、わたしは、この疑いを方法にして、社会学ということをはじめようと思った。

わたしは、あくまで、わたしの正当さを主張するよりなれが、それは、社会の不当さを主張すること、全く同じことである。

《社会学は、わたしがひとりを選んで、社会との戦いの形式である。》

わたしにとって興味があるのは、人がこの戦線にどのように展開し、どのように整へていくかであつて、それ以外のことではない。(戦いとよぶ以上、わたしは勝敗にこだわるだらう、それは、歴然と定まるものであるから。わたしは、人類のひとかけらであることに、誇りをもっているのだ、ゆ々社会と折合いが悪いぐらいのことで、へこたれることはないと思う。)

社会に対する根本的な疑いなしに、社会学がはじまるなどとは、わたしには到底信じられない。常識、通念のことごとくが無効である(といふは、わたしではなく、社会に属する)。徹底して社会を疑い、常識を疑い、既存の設を疑い、概念を疑い、論理を疑うのであるければ、この仕事ははじめられない。これは、なみなか、坊ちゃん子供にできるゆゑではないはずだ。内側から発想していただのでなみえてこなれ社会の峯とつものものが、あるのだから。

そういうわけで、わたしの社会(学)理論は、次のように、真直ぐ

"記号空間論" (草稿群)

1977年中に完成した断片に、つぎのものがあつます。

1. 「性別論(予稿)」 50.-
: 性別の必然性と恣意性とを論定する。
2. 「家族の生成理論(草稿)」 145.-
: 身体性における分離/統合の種造として、〈性〉ならびに家族概念を規定する。
3. 「「家族の生成理論」は可能か」 80.-
: 規範を記述する方法としての生成理論を吟味する。
4. 「記号空間論(素描)」 70.-
: 記号空間論の構想の内、原理論の部分を含む、展望する。

このほか、「月報1」(¥15)、「月報2」(¥15)があつます。

わたしから生えてくる。

わたしは、わたしの作業が、同僚の諸氏からみて、なるべく明瞭な度を経営ことになるように、つとめてきたつもりである。わたしは、自分が向きかへか之向をしようとしている人間なのか、吹きさらしのままかくすところなく明らかにしてみたい。(この月報だつたそのために出しているようなものだ。) そうしていること(だけ)がもっともよいことであり、そのほかの世間的な近所づきあいの類いは、したることかというものが、わたしのやり方なのだ。まづ^{てめえ}自分を磨いてかかる、というのが、人づきあいの基本である。とすれば、わたしの社会づきあいは、わたしの理論をとことんみがいていくところからしか、はじまりようがない。それには、まだ、だ

- 5. 「<遠隔対称性>をめぐって
〜心的世界をどう論ずるか〜」 1,160.-
: <遠隔対称性>論と記号能力論との、類似と対照。
- 6. 「<言語>派社会学の立法論的基礎」 1,105.-
: 「行為の統合構造」仮説へのH2の、試論。
- 7. 「加工品の眩暈
〜「言語的定在」論・そのI〜」 1,125.-
: 「言語的定在」概念により、人間の根源的な歴史性を
基礎づける。
- 8. 「構造=機能理論の射程と限界」 2,210.-
: 構造=機能主義の論理と方法を内面的に批判する。

金額は、SDPコピー感電紙の奥巻(B4 1枚5円)を元とします。郵送料は、50gまで100円、100gまで140円、250gまで200円、500gまで300円、1kgまで350円。

11月年月がかりとうだ。

また新しい11年がめぐってくる。わたしも、20才のころには、25才すぎの野郎どもは、なすすべもな11無能なろくでなしで、ひとりのころが信用ならない石頭だと、思っていた。ましてや、自分が30才になるまで生き永らえていくところなんぞは、とうてい想像できなかった。夭折幻想があったわけではなすが、要するに、時の流れを甘くみていたのだろう。

「20になったとき、つくづく、年をくったもんだと思った。この命じゃあ、30になつたら、あつかりおいはれじじいになつちまうだろう。」(Richard Starkey)

しかし、時の流れは自然現象であり、あま、さえ、平等である。

「ほうつておいても、年はとるものであし」(山口百恵)
時は、変えるだろうとわたしが予想していたところをゆくもかえずに、それ以外のところをどんどん変えていくだけであることに、いまや気がついてきた。つまり、世界をたった1mmでもわたしの好む方向にゆくまげるとためには、あるいは、わたしの意思する事態を出現させるためには、無償の力や金を延々と投入する以外に、仕方がないのだ。時は、これに味方しないだろう。

"記号空間論"の作業、そのほかについての、御意見、御批判、文相等を、切望いたします。また、コピーを所望のなにも、遠慮なくお申しこつて下さい。

橋爪大三郎 (Hashizume Daisaburo)
〒248 鎌倉市材木座5-9-11,
PHONE 0467-22-1030
郵便振替 横浜51782